

環境に視点 未来読む

好況に浮かれず、不況に耐えた。自慢の、ものづくりが環境ビジネスで花開いた。



1

買い物客でにぎわう名古屋市の緑区のスーパー、アピタ鳴

海店。店内に置かれた大きな箱。中には大量の使用済みレジ袋が入っている。再びレジ袋に生まれ変わらせるために回収している。運営するユニーがレジ袋有料化に続き、環境対策の一環として始めた。レジ袋をレジ袋へという日



カネミヤが開発したポリ袋自動分別洗浄処理機と間瀬隆夫社長(半田市八軒町)

「社会が変わる」確信貫く

これに、レジ袋を入れると、きれいに洗って、裁断されて出てくる。2秒ほどで、ごみが「原料」になった。



半田市八軒町のカネミヤが開発し、2005年から販売を始めた。それまで燃やすか埋め立てるしかなかったレジ袋やポリエチレン袋。企業によつてはその処理費に月100万円もかかっていたのが、

処理機のおかげで資源として再利用でき、CO2削減もアピールできるようになった。

従業員30人の零細企業が環境ビジネスの分野に参入したのは5年前。1989年に創業した当初は半導体製造の下請けだった。だが2001年のIT不況で発注が9割近くも減り、リストラに踏み切っ

た。「オリジナルの商品がないと生き残れない」と間瀬隆夫社長(62)。成長産業と目をつけたのが環境だった。

経営が厳しい中での挑戦。洗浄に使う水をできるだけ少なくするため、高速回転の遠心分離と摩擦で洗浄できるようにするなど知恵を凝らし、工夫を施した。

やっと完成にこぎつけ、出品した名古屋市の展示会。他社のブースが専門業者によつてデコレーションで彩られる中、カネミヤは、ベニヤ板と包装紙で作った看板で、アピールした。

1台1200万円もするが、ユニーのほか、日清食品やカゴメなど大企業を中心に150台以上も売れた。「高い精度が当たり前に求められる愛知の製造業。ここで鍛えられたという強みがあ



①投入前の汚れたポリ袋
②投入2秒後、「原料」になって出てくる

った」と振り返る。